



■写真1(上)一明治前期の秋田港(土崎湊)
帆船のほか、沖に蒸気船をみることができる。
明治10年の新聞には、「1～11月までに入港した船は大小499艘あり、故に市中の利潤ともなり殊に賑々し」とある
■写真2(左)一現在の秋田港
港湾の近代化が進んでいる



あの頃の風景

海道「北前船」編 第1回 水運と川反のにぎわい「秋田」

株式会社建設技術研究所/社会システム部環境システム室
松嶋健太 MATSUSIMA Kenta



■写真3一かつての土崎湊のにぎわいの絵
町中を多くの人が行き交う。絵の中には米俵が特に目立ち、重要な交易品であったことがわかる(ポータルタワーセリオン展示パネル)



■写真4一明治36年の旭川馬口労町橋(今の刈穂橋)船着場
船で旭川を移動し、1丁目橋や5丁目橋の船着場にも物資を運搬していた



■写真5一現在の那波家水汲み場付近
護岸が整備され、水辺との距離が広がっている

毎年一つの「道」や「川」などを巡るシリーズも3年目を迎えました。今年は、かつての海の大動脈「北前船」の海道を巡る「あの頃の風景」をお送りします。

秋田港(土崎湊)のある土崎地区には、各地との交易を物語る名残がある。それは、地区の家々の姓に、越後、越前、加賀、三国などの昔の国名や地名が多く見られることだ。これらの姓の存在は、かつての交易の範囲と考えられている。秋田港は、室町時代に定められた日本最古の海洋法規集「廻船式目」で、「三津七湊」と呼ばれる十大港湾のひとつに数えられる重要な港であったのだ。特に、商人であり土木事業家の河村瑞賢が1672年に開いた日本海と大阪を結ぶ西廻り航路による北前船の往来は、江戸時代後期から明治時代に及ぶ隆盛をもたらした。

旧雄物川の河口にある秋田港には、かつて舟運を利用して、内陸からは良質な秋田杉や米などの農産物が、港からは古着や木綿、塩などが運搬されていた。雄物川の舟運は、支流の河川を含めて船着場として確認できるものが120カ所ほどあり、そのうち河港として機能していたものは30カ所にも及んでいた。現在の秋田市街に近い河港は、川尻にあった。そこから支流の旭川を遡った、馬口労町橋、5丁目橋、1丁目橋の船着場では、秋田港に着いたさまざまな物資が陸揚げされていた。5丁目橋や1丁目橋の船着場は、今の川反地区にあたり、当時は料理屋や芸妓屋の建ち並ぶ、にぎわいのある街であった。

江戸時代から明治時代にかけての旭川は、舟運に利用されていただけでなく、飲み水としても利用されていた。今は2丁目橋のたもとに「那波家の水汲み場」が残るのみであるが、当時は川反の各町に「カド」と称する共用の水汲み場があるなど、人々の生活と旭川は、密接に関わっていたので



■写真6(上)一大正時代の旭川と川反地区
旭川に面した水際には、ヤナギなどの緑が配置されるなど、趣のある景観が形成されていた
■写真7(左)一現在の4丁目橋付近

ある。現在の旭川には往時をしのぶよすがもない。護岸はコンクリート化され、川に面した建物もむしろ川に背を向けたものとなっており、かつての川との関わりが少なくなっているように感じられる。また、川反地区は今なお東北有数の繁華街であるものの、以前のような活気は薄らいでいるようだ。

そもそも旭川と名付けたのは、江戸時代後期の国学者で紀行家の菅江真澄とされている。著書である『筆のまにまに』には、自身が川の源流をたどり「そのよしは朝日の嶽より落流る也(その理由は朝日の嶽(旭岳)より流れ落ちるからである)」と命名の理由を記している。そこには名付けを命じた9代秋田藩主佐竹義和が、和歌に詠むことのできる名であるとして大変喜んだとも書かれている。

「あの頃」の旭川は、土崎の湊から物資を運び豊かさをもたらしただけでなく、生活や文化を形づくる役割も担っていたのであろう。今、川反地区のにぎわいを取り戻そうとする動きとして「かわまちづくり市民ワークショップ」の開催や、右岸側を都市景観地区に指定することで、秋田市の顔としての「美しい街並み」を創造するための取り組みが進められている。これから、どのような顔を持つ街として「にぎわい」を取り戻すのか注目したい。

今回は、北前船の北の寄港地「江差」を巡るあの頃の風景を紹介します。

- <参考文献>
1)「思い出のアルバム土崎」無明舎出版 1991 無明舎出版
2)「雄物川の河川交通」斎藤實則 1995 秋田県文化財保護協会
3)「秋田市史第四巻 近現代1 通史編」秋田市編 2004 秋田市
4)「40年前の秋田市」無明舎出版 2003 無明舎出版



■写真8一現在の川反4丁目付近
大正7年開業の老舗料亭演乃屋のたたずまいを今も見ることができる。往時は秋田の芸者たちがいろいろな料亭を行き来したという



■写真9(上)一昭和28年頃の2丁目橋
路面電車とボンネットバスの往来を見ることができる
■写真10(右)一現在の2丁目橋
多くの車が行き来する交通の要衝であることは変わらない